

# 薬史学会通信

No.10 1990年2月

〒192-03

東京都八王子市堀之内1432-1

東京薬科大学内

日本薬史学会事務局

## 日本薬史学会総会(東京)のおしらせ

本学会の総会は、従来、毎年4月に行われる日本薬学会年会の薬史学部会の会場を借りて、昼休みのひとときに行っておりました。

しかし本年の薬学会年会(第110回)は北海道札幌の地で8月下旬に開催されるので、4月1日を会計年度とする本会は、独自に行事を企画することになりました。本学会にとっては初の試みであり、会員多数のご参加を希望いたします。

日 時：1990(平2)年4月7日(土)

場 所：品川区荏原2-4-41 星薬科大学医薬品化学研究所ホール

11:00~12:00 日本薬史学会総会 (於 小ホール)

<休 憩>

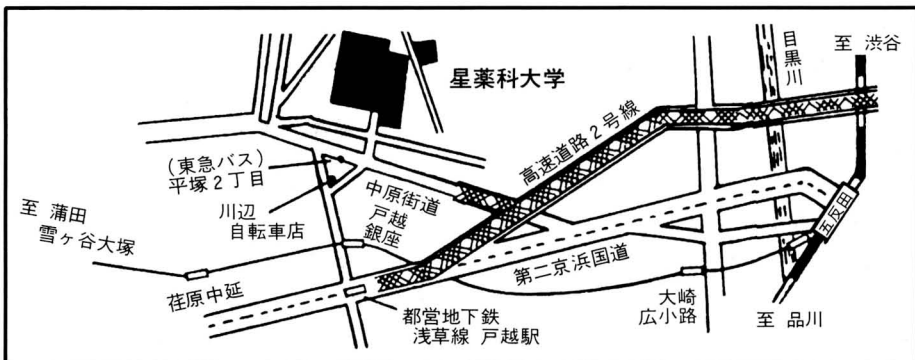
13:00~13:50 ビデオ上映 (於 大谷記念ホール)

「医学・薬学の父 ヒポクラテス」

明治薬科大学 大槻 真一郎

13:50~17:00 薬学現代史シンポジウム (同 上)

「歴史の目による薬学教育の検討」



## 歴史の目による薬学教育の検討

- 挨拶  
日本薬史学会々長 野上 寿
- 話題提供
  - ・ 日本における薬学教育検討の流れ(シンポジウムの方向づけ)  
東京薬科大学 川瀬 清
  - ・ 教育観の変革, 戦後産業教育の経過から  
日薬生涯教育委員会 久慈 光亮
  - ・ 実学教育の実施, 臨床薬学大学院教育の経験から  
福山大学薬学部 菅家 甫子
  - ・ 基礎教育の課題  
日本化学会 林 良重
- 追加発言
  - ・ 専門職としての薬剤師とその教育  
水野薬局 水野 睦郎
  - ・ 教育機器支援による薬学教育の事例から  
神戸学院大学薬学部 山岡由美子
- 討 論

## 薬学現代史シンポジウムの「ねらい」と方向

### ○薬史学会主催「薬学現代史シンポジウム」

今日のごとく急変する社会にあっては、現在のあり様が直ちに歴史的存在となり、誰でも歴史の形成に参加し、また、歴史の証人となって近未来建設のための資料を提供することができる。

そこで本学会では、薬をめぐる諸問題に、歴史の目を持ちつつ近接し、薬学各領域の健全な発達に資することとした。

### ○シンポジウム

#### 「歴史の目による薬学教育の検討」

他の領域と同じく、薬学の分野にあっては教育の重要性は常に説かれ、組織的な検討、討論会・座談会、そして文書・報告など、枚挙にいとまなく論じられて来ている。

しかし、その膨大さに比べて、さしたる成果が得られていない原因の主たるものは、討議が思いつきの域を脱していないか、現

状の解釈に終わっていたり、一定の期限内に当面の課題を解く途上での検討であったり、何れにしても教育や医療の基本に立脚した検討でなく、引きつづく改革の指針を導くに至らなかったことに因っている。

そこで今回は、何れも、新しい教育の実践者に登場願ひ、できるだけ事例報告の形を採りつつ、旧来の考え方・あり方から、どんな経過で現在に至っているか、これらの中での問題点は何か、などを出しつつ、参加者一同で今後の展望を描きたいと考える。

#### 星薬科大学への交通案内

- ・ JR五反田、池上線に乗換、戸越銀座下車、徒歩5分
- ・ 地下鉄浅草線、戸越下車、徒歩7分
- ・ 目蒲線、武蔵小山下車、徒歩8分

## ○討論の方向づけ

本シンポジウムを企画した日本薬史学会としては、取扱う事象を流れ(時間)あるいは相互関連(空間)の中でとらえ、昨日に引きつづき今日を見、明日への糧にするよう討論を進める：

久慈先生ご担当の課題では、現在の大多数の大学教育を旧来の教育に位置づけ、対するに戦後、とくに技術革新の到来期に、企業内に起った人材開発を含む発想の転換を回顧し、現在、先進的企業が到達している水準を紹介し、遅れている日本薬学教育界を啓蒙して頂く。

菅家先生は、臨床薬学教育を新しく始められるに当って、旧来の薬学教育環境と、現在の福山大学でのそれとを比較する形で考察し実学教育のあり方を御自身の教育実践の中から滲み出させて頂く。

薬学教育を経て基礎化学教育の世界に入られた林先生からは、従来の薬系大学が基礎教育重視を言いながら、実際には基本事項の暗

記強制に終って、受講者を啓発する教育になっていない事情に対し、真の教育論を踏まえた化学基礎教育などを通して、大学教育のあり方について示唆をいただく。

水野先生からは、かねてより主張されている、専門職としての薬剤師の立場から教育問題に近接して頂くわけであるが、西欧における市民の自立を経た「成熟した」社会をキーワードとし、近年の日本において地域保健医療への新たな期待をかけられている薬剤師の課題に触れつつ追加発言を頂く。

山岡先生からは、教育機器を駆使して行っておられる実際の紹介を通して、現代の教育理論と方法を学び、討論に具体性を持たせることにする。

討論について：現在、薬学教育においては各方面で矛盾が山積しており、討論の中では個々の課題の提出が予想されるので、教育そのものに対して歴史の目で大極を把握するよう誘導に努める。

## 海外の薬史学会 紹介 (1)

山田光男

従来から、欧米の薬史学会の活動状況、あるいは、これら学会と日本薬史学会との交流の有無などについて、本会々員からお尋ねを受けることが多いので、たまたま私が数年前から、アメリカ薬史学研究所および国際薬史学会(西独に本部)の個人会員として入手している各種Informationの中から、皆様のご参考になりそうな事項を取上げて、順次ご紹介する。

その1、アメリカ薬史学研究所 総会

3月にワシントン特別市で開催

アメリカ薬史学研究所(The American Institute of the History of Pharmacy)は、1941年(昭和16)に米国マジソン州ウイソコン市に設立され、非営利的な国立機関組織として、米国薬剤師協会、米国病院薬剤師協会およびEli Lilly, Merck, Upjohn など多数のス

ポンサーの後援を受けて、歴史分野におけるPharmacyへの認識と理解を普及することを目的として、広い範囲で活動を行っている。

当研究所の一般会員組織として、わが国の薬史学会の普通会員に当たる個人会員の制度をもっており、年会費25ドルで普通会員として入会出来る。

当研究所の定期刊物物としては、"Pharmacy in History", および"A. i. h. p. Notes" が季刊で発行されている。また、不定期に各種の刊物物を発行している。たとえば、

Pharmacy Museums and Historical Collections in the United States and Canada

92ページ (1988)

One Hundred Years of the National Formulary (Symposium) 157ページ (1989) などが、個人会員である私の自宅宛に送付されてきている。

当研究所の本年(1990)年度総会の申込案

なが、近着の A. i. h. p. Notes に掲載されていたので、ご紹介する。

当研究所の1990年度総会は、3月10～13日にワシントン特別市で開催されることに決定し、歴史部会および社会部会の変化に富んだプログラムが計画されている。また研究所総会は、米国薬剤師協会の総会と同じ期間に開催されるので、当研究所会員は、参加費なしで米国薬剤師協会総会に参加でき、研究所の業務部会、評議員会へも出席を歓迎するとのことである。

歴史部会は、3月11日(日)に、ワシントン特別市一帯における薬物史的な資源(Pharmaco-Historical Resources)についてのシンポジウムを開催し、John Parascandola ら5人の特色ある研究発表が行われる予定で、このほか2会場で、紙上発表の予定。

また Kremer 薬史学賞の授与講演会は、3月12日(月)にスミソニアン研究所・国立米国歴

史博物館で開催し、講演終了後に昼食会および同館内に陳列してある薬局関連展示物の見学を実施予定。

3月13日(火)には、薬物容器収集家のためのワークショップを終日、開催の予定で、特に歴史的な薬物容器の、収集、保存、展示に関する実習を行う。この指導には、スタブラリードピーター薬局博物館長の M. Harris 氏が当たる予定で、実習の場所が限定されているので、予め申し込んで欲しいとのことである。

以上のように米国薬史学研究所の総会が、特色ある方式で3月中旬に米国ワシントン特別市で開催される。現在、当会の評議員である中川富士雄先生(東大病院)は、以前、米国留学中に、当研究所の Dr. Glenn Sonndecker 前所長に指導して頂いたとお話も伺っており、世界は狭いとの感を深くしている。近い将来、当研究所との交流を深めたいと思う次第である。

## 薬史学会事務局より

○ いよいよ今世紀も最後の90年代に入りました。変化の時代の呼び名の通り、東欧では考えられもしなかった事態が次々と起きています。

西側世界にしても、そしてわれわれ医薬の領域でも、月はおろか週単位で新しい情勢に変わりつつあります。

薬史学会昨年の特徴は、投稿原稿の急増でありました。それも秋以降にドッと集中したのであります。

これは本会が、最低状況の維持に甘んじ、啓蒙事業が中心であった時代から、研究組織にふさわしい活動に変えるべき時が来ている事を意味しているでしょう。

そこで、4月7日の総会では、薬史学雑誌投稿規程を大巾に改めて、会の経済的基礎を確立すると同時に、投稿希望の会員へ出来るだけ早く論文公表が出来るよう体制を整える

ことにいたしました。

○ 従来、薬史学会の活動が東京中心に偏っていたので、全国的な活動にすべく、西日本支部が開かれる運びになっています。本年は大阪で「花の万博」が開催されるので、それに合せた行事が今企画されていると伺っています。

○ 薬史学会としてやりたい事は、考えてみると次から次へと出て参ります。全国薬系大学で歴史に関心のある方々の交流、地域に散在する医薬の施設や保健・医療のための年行事の発掘、歴史的資料の整理・保存、本学会々員の親密な交流、関連各学問領域(医学史、化学史、福祉関係史など)との交流など皆さんからも、どうぞ好い案をどしどしお寄せ下さい。

○ なお、先号(薬史学会通信No.9)第5ページの、ビデオ・医学薬学の父・ヒポクラテスは、都合により有料版付が中止されました。ご覧になりたい方は事務局に問合せ下さい。